

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 11日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530114

研究課題名（和文） 近代フランス政治思想におけるパトリオティズムとナショナリズム

研究課題名（英文） Patriotism and nationalism in the modern French political thought

研究代表者

川出 良枝（KAWADE YOSHIE）

東京大学・大学院法学政治学研究科・教授

研究者番号：10265481

研究成果の概要（和文）：共和国という体制を政治的に支持するものとしてのパトリオティズムと民族的同一性を基盤にするナショナリズムとの関係は、従来想定されてきたほど簡単に図式化できるものではない。本研究では、両者の関係の複雑な推移を、アンシャンレジームからフランス革命、およびポストフランス革命の時代まで跡づけることによって、「祖国への愛」という観念のもつ問題性を開明した。

研究成果の概要（英文）：The relationship between patriotism based on the fidelity of the citizens toward the republican government and nationalisms based on the national identity is far more complex than as has been previously assumed. This project clarified the characteristics and significance of these two ideas in the modern French political thought by examination of the process of the transformation of the notion of "love of country" in the Old Regime, the French Revolution and the post-Revolutionary period.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：政治思想史

1. 研究開始当初の背景

古典的共和主義研究とナショナリズム研究が、ともすれば相反する二つの図式を描き出しているようにもみえるため、本研究によってその架橋をめざすというのが当初の背景であった。

古典的共和主義研究に関しては、J.G.A.

Pocock によるこの伝統の発掘以来、古代ギリシア・ローマの共和政をモデルとしつつ、祖国愛や公共精神をもつ市民像に着目する研究が蓄積された。ルソーの政治思想やフランス革命研究にもこうした新しい解釈動向が看取される。共和主義的な祖国愛の議論は、市民の自由を確保する「共和国」という政治

体制に対する理性的な「愛」であるという点で、「民族」「言語」「文化」の共通性を強調するタイプのナショナリズム（いわゆる「エスニック」・ナショナリズム）とは一線を画すとみなされ、その意義が積極的に評価されることも少なくない（cf. M. Viroli, For Love of Country, 1997）。他方、18世紀後半のフランスにおけるナショナリズムの勃興に着目する新しい歴史研究も提出された（cf. E. Dziembowski, Un Nouveau Patriotisme Français, 1750-1770, 1998; D.A. Bell, The Cult of the Nation in France: Inventing Nationalism, 1680-1800, 2001）。J.J.ルソーの『ポーランド統治論』やシェースの『第三身分とは何か』におけるナショナリズムの契機についても、一定程度研究が進んでいる。果たして、フランスにおけるパトリオティズム（もしくは、いわゆる「シヴィック」・ナショナリズム）は、ドイツを典型とするナショナリズムとは本質的に異なるものなのか。前者は、偏狭で排他的な民族主義のもつ危険性から免れ、後者は、常に市民の自由を脅かすものといえるのか。こうした疑問に発し、本研究を志すこととなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大別して4つある。

(1) J.J.ルソーにおける「市民」「国民」「人類」という三つの観念を書簡を含むその全著作にわたって精査し、その関係を明確化する。ルソーの思想は時代とともに変遷するが、その変遷の中に、パトリオティズムとナショナリズムとの間の緊張にみちた関係が原型的に表出しているように思われるからである。膨大な研究の蓄積があるルソーではあるが、近年、Bruno Bernardi 等によって厳密なテキスト批判に基づく新全集の刊行が準備されるなど、研究状況は活況を呈している。こうした動向をふまえつつ、ルソーにおいて、パトリオティズムとナショナリズムの二義性をルソーの思想の中に探り出す。

(2) 英仏関係という政治史的な要素が、思想家に与えた知的な影響を明らかにする。18世紀前半における比較的良好な英仏関係は、7年戦争（1756-63）をきっかけに鋭い対立の時代に突入する。ルソーのイギリス観、18世紀後半に反イギリス論を展開した著述家・歴史家たちのイギリス観を探求し、両者を比較しつつ、具体的な政治史的な文脈の下での「フランス人」としての国民意識の形成を考える。

(3) フランス革命期の「市民」概念、「国民」概念を分析する。中心にくるのは、革命における「国民 (nation)」概念の形成に決定的な影響を与えた『第三身分とは何か』の著者であるシェースの分析である。シェースについては、その大量に残された経済論関係の草稿（近年、ようやくその一部の活字化が進みつ

つある）を利用し、国民経済の形成とそれを担う政治主体という観点から、本格的な分析を試みたい。次に、ロベスピエール、サン・ジュストといったジャコバン派の議論を再検討する。革命期における二つの思潮の意義を明らかにした後、ジャコバン派的な「市民」概念とシェース流の「国民」概念との思想的な関係を徹底的に討究したい。

(4) フランス革命の収束過程（ポストフランス革命の時期）において、上記の議論とは異なるタイプのパトリオティズム概念がスタール夫人やコンスタンら、いわゆる「自由主義者」によって提起される。個人の私的領域における自由を擁護し、国家権力への懐疑的・批判的傾向が強く、また、コスモポリタンの気質をもつスタール夫人が、革命の経験を経る中で、市民と国家、また人類の共同体を結びあわせる紐帯としていかなるものを構想したかを政治思想的に明らかにする

3. 研究の方法

本研究は、18世紀後半から、革命をへて、ナポレオン帝政が確立するまでの時期のフランスを主たる舞台としつつ、パトリオティズムとナショナリズムという二つの思想のそれぞれの特質を明らかにすることをめざす。本研究の方法として中心にくるのは、一次文献・二次文献の収集およびその分析・解釈・検討である。なかでも、ルソー、シェース、スタール夫人という3名の思想家の作品の思想内在的な分析であるが、あわせて、彼らと同時代に活躍した有名・無名の著述家、パンフレット作者、政治家・革命家の作品や発言を取り上げたい。こうした文献の中には、日本国内で入手できないものも多く、フランスでの資料調査は不可欠であった。また、申請者が単独でおこなう研究であるため、研究組織は構築しないが、外国人研究者の積極的招聘による研究会の開催等を通して、関連する研究者との積極的な交流を行った。

4. 研究成果

(1) ナショナリズムとパトリオティズムという二つの要素を内に含むルソーの政治思想の討究は、本研究全体にとって、いわば鍵ともなる課題であり、本研究では、以下3つのアプローチによってこの問題を討究した。

① ルソーの戦争論、平和論を探求することによって、ルソーの「市民」「国民」の観念の特質を明らかにした。G. Lèpan, Jean-Jacques Rousseau et le patriotisme, 2007 や H. Ghorbel, L'idée de guerre chez Rousseau, 2vol, 2010 などを手がかりにしつつも、最新の校訂本 (Principes du droit de la guerre. Ecrits sur la paix perpétuelle, 2008) を用いて、ルソーの「戦争状態」論を独自の観点から分析し、個人の間には戦争状

態は発生せず、ただ国家と国家の間においてのみ戦争状態が生起するというルソーの議論は、単純な国家批判論ではなく、その連邦主義にもとづく独特な共和政論と密接な関係の下にあることが解明された。ただしこの点については、ルソー研究をさらに深化させることによって、はじめてオリジナルな研究成果として結実するもので、現時点ではまだ仮説にとどまるとも言える。

②ルソーの政治思想における「市民」像を、その初期の著作から晩年の著作に至るまでの時代順に分析・考察した。初期においては、ディドロとの良好な関係もあずかってか、啓蒙思想に特徴的なコスモポリタニズムに対して好意的な評価をくだしていたルソーであるが、『学問芸術論』や『政治経済論（統治論）』において、古典古代の共和国の市民に対する傾倒を強め、同時代に流行したコスモポリタニズムを厳しく批判するにいたる。最晩年の『ポーランド統治論』においては、ルソーは、国民性に対する関心や認識も深めたといわれているが、それをルソーにおける「ナショナリズム」の発露とみなして良いのかどうかは解釈の分かれる部分であり、この点については、慎重に検討し、その結果、やはりそこには、言語や血統、歴史的な同一性をもとにした「民族」という観念が重要な役割を帯びていることが明らかにされた。こうした民族の強調は、政治的独立を常に脅かされ、不安定な政治体制が続くポーランドにおいて、政治的統合よりは民族的な一体性を重視せざるを得ないところから由来すると説明できると考える。いずれにしても、ルソーの議論は、後にフィヒテが本格的に定式化するエスニックな一体性を重視する「民族」観を先取りするものである、という結論を導くに至った。ルソーのポーランド論も、フィヒテの民族論も、政治的独立を脅かされるという状況下で提起されたものであるという点には十分目を向ける必要がある。

③ルソーの思想的遍歴を、ルソーにとっての「イギリス」という問題と連動させて考察した。以下の(2)で述べるように、ルソーが政治的著作を発表した時代は、英仏関係が友好から敵対へと劇的に変化した時期である。「ジュネーブ市民」としてフランスの絶対君主政を批判するルソーは、実のところ、イギリスの政治体制・経済体制に対しても鋭い批判を展開している。特に、注目に値するのは、経済発展と海軍力を基盤に世界にまたがる植民地建設に歩を進めたイギリスとイギリス国民に対するルソーの批判的分析である。ルソーが祖国愛の重要性を説き続けた背景の一つとして、「帝国」として発展するイギリスへの対抗という事情がある。ただし、ルソーの『新エロイズ』を検討する中で、イギリス嫌いのはずのルソーは、この作品の主

要登場人物に、イギリスに対する高い評価を語らせているなど、ルソーについてはもう少し丁寧な扱いが必要であることも痛感させられた(今後の課題であろう)。

(2)フランス18世紀および革命期における共和主義思想の位置づけを、イギリスのそれと比較するという作業を行った。イギリス18世紀においては、ヒュームやスコットランド啓蒙の論者に典型的に見られるように、「自由な国家」という理念の下で、共和主義思想と自由主義思想が結びつく局面が新たに形成されたことが明らかになった。他方、フランスにおいては、モンテスキューやルソーがその典型ではあるが、共和主義的な発想が古代ギリシア・ローマをモデルにするにとどまり、商業の発展する近代社会とは疎遠なものであるという認識が突出した点も明らかになった。特に、ルソーのイギリス批判は、こうした傾向にいわば拍車をかけたともいえよう。なお、研究期間中、イギリスからはケンブリッジ大学のフランス思想研究の大家である Cecil Courtney 氏(パークの研究者でもある)やフランスからはフランス革命およびポスト革命期の自由主義研究で知られる政治学院の Lucien Jaume 氏やルソーやモンテスキューについて多数の論考を発表しているボルドー大学の Céline Spector 氏を東京大学に招聘し、研究会が開催できた。こうした国際的な交流活動を通し、イギリスとの比較のなかで、フランスの共和主義思想の特質を解明できたことは本研究のなかでも、大きな成果の一つであり、学界に大きなインパクトを与えることが想定される。

(3)18世紀後半の英仏関係の悪化という文脈が、フランスのナショナリズム形成に際して大きな影響を与えたことが明らかになった。これは、抽象的にパトリオティズムとは何か、ナショナリズムとは何かを考えているだけでは分からない部分である。18世紀前半のフランスでは、商業と自由の国イギリスという観念が確立した。こうしたイギリス像は当初、フランスの改革の方向性を示す良きモデルであると考えられてきた。ところが、18世紀後半においては、こうしたイギリス観は180度転換し、否定の対象となる。すなわち、敵対の度合いを増すイギリスとの対抗上、フランスでは、自国のアイデンティティをそれと相反するもの、すなわち、国内における農業生産重視、イギリス流の植民地帝国とは異なる伝統的な君主政支配の安定性というところに求めるにいたった。こうした経緯を様々なテキストの検討から具体的に検証することができたのは本研究の大きな成果であろう。しかも、こうした議論の枠組みは、フランス革命期にも引き継がれ、そこにおいて、ナショナリズムが噴出した際に、それが独特の反イギリス思想、反自由主義的傾向を生み

出したことも明らかになった。

(4) 当初の研究計画では必ずしも中心に来るものではなかったが、研究の進展の中で、ドイツにおいて、フランス革命がどのように受容されたかの研究を開始した。ドイツの自由派がフランス革命を支持しつつ、それが特にナポレオンによる侵略という手段を媒介にしてもたらされたことへの屈折した議論が明らかになりつつある。フィヒテの議論などはその典型とも言えよう。また、ドイツでは、自由派というよりは、むしろ保守派の間に、ロベスピエールを支持する議論があったことも興味深い発見であった。

(5) シェースの『第三身分とは何か』における「国民」概念の分析に研究のターゲットをしぼり、以下の3つの作業をおこなった。

① シェースが論争相手としたと推定されるラボー・サン・テティエンス、ムーニエ等、同時代の革命家による政治パンフレットとの比較を通して、高名なシェースの「国民」論がいかに同時代の議論とは異なるものであるかを解明した。

② シェースの草稿で展開される国民経済論の精査を通して、これまで十分解明されてこなかったシェースの思想的バックボーンを明らかにした。すなわち、貴族を非生産的な階層として断罪するシェースの議論は重農主義やアダム・スミスの議論を背景に持つもので、生産者としての国民、国民経済の発展に貢献するものとしての国民という発想を濃厚に持つものであることが明らかになった。

③ ルソーとシェースの政治思想の比較をおこなった。シェースはその社会契約論的な議論においてルソーに一定程度負うものの、シェースの「国民」概念自体は、ルソー的な古典古代をモデルとする祖国愛の議論とは一線を画すものであり、先述のようにむしろ、重農主義者やアダム・スミスの国民経済論をソースとして形成されたものであることが解明された。

こうした3つの作業を元に、こうした限定的な性格をもつシェースの「国民」観は、ジャコバン派の祖国愛をめぐる言説にはさほどの影響を与えておらず、もっぱらジロンド派のブリッソ（とりわけ、彼が主宰した雑誌『フランスの愛国者』(Patriote Français)における諸論説)における愛国心論に顕著な影響を与えたことが明らかになった。研究のいわば副産物として、シェースの『第三身分とは何か』を新訳(岩波書店、2011年2月)のかたちで出版した。

(6) 分析を進めるなかで、当初の計画にはなかった女性と祖国、女性と国民国家という問題の重要性が発見された。この観点から、以下の二つの作業をおこなった。

① ルソーの未完の劇作『ルクレチアの死』に

おける女性像に注目した。王家の息子に陵辱され、抗議の自殺をおこない、ローマ共和国設立の礎になったとされるルクレチアは、古代ローマのルクレチア伝説(リウィウスの『ローマ史』に登場するもの)、アウグスティヌスによるルクレチア批判、マキアヴェッリ等ルネッサンスの市民的人文主義者のルクレチア再評価など、長期にわたって様々に論じられ、解釈されてきた人物である。ルソーの作品は、そうした背景をふまつつも、ルソーの女性観を強く反映するユニークなものであることが解明された。この論点を深めるため、ルクレチアと『新エロイズ』の主人公の比較をおこない、女性もまた男性と同様、祖国に貢献する主体であるのか、その貢献は男性と同じものか、異なるものとみなされてきたか、といったルソーにおける「女性の徳」の問題を考察した。

② イギリスの女性政治理論家であり、フランス革命を批判したバークに反論を加えたことでも知られるメアリ・ウルストンクラフトの祖国愛をめぐる議論を分析した。ウルストンクラフトは、ルソー批判者としても知られるが、女性を排除しようとするルソーと一線を画し、女性と祖国の強い関わりを強調していることが確認された。ただし、ただし、その徳のあり方は男性のように武勇という面で発揮されるというよりは、むしろ平和的な日常でこそ発揮されるもの、その意味で女性に独特な形であるべきだ、という女性市民像が描かれており、その点では必ずしもルソーの議論とまったく相容れないというわけではないことも解明された。こうした方向性はさらに発展されるに値するもので、早急に本格的な検討をくわえる必要があると考える。

(7) フランス革命終息期における祖国愛の議論を、主としてスイス出身でフランスで活躍したスタール夫人の一連の著作の中に探った。特に、そのフランス革命論(『革命を終息させよう 現下の情勢』(Des Circonstances actuelles qui peuvent achever la Révolution)が重要なテキストである。ジャコバン独裁とテロルという暴力的な帰結を目撃したスタール夫人が、政治的安定と革命の成果の継承という困難な課題を両立させるための方策を探ったこの著作には、革命期の「祖国愛」概念に対する鋭い批判が展開され、成立したばかりの共和国を支える新しいタイプの市民像が描かれている。彼女の後年の著作(『ドイツ論』『フランス革命文明論])も分析の圏内におきつつ、ジャコバン派にも、またナポレオンにも与しなかったスタール夫人の議論は、「リベラルなパトリオティズム」とでも呼び得る独特な政治思想であった。こうした彼女の祖国愛についてのモデルは、同じく私的領域における市民の連帯を基盤に新しい共和国を構想し

たバンジャマン・コンスタンの思想とも連動するもののように思われるが、残念ながら、コンスタンとスタール夫人の比較という作業は想定したよりも困難で、期間内には十分なレベルの研究が進まず、この点は、今後の課題としたい。

(8)以上の分析を総合して、近代フランスにおけるパトリオティズムとナショナリズムの関係について、いくつかの見取り図を描いた。まず、イギリスの初期近代共和主義思想との比較から、フランスにおいてはかなり極端で純粋な共和国モデルが形成された。すなわち、全員参加を必要不可欠な前提とし、近代の商業社会と相容れないものとして描き出される共和政モデルである。その一方で、イギリスとの緊張関係のなかで、農業社会に根ざす絶対王政への忠誠という形で、「祖国への愛」を唱える独特な議論も成立したことが発掘された。フランス革命期の「国民」(ナシオン)概念については、それは少なくともシェースにおいては、古典古代をモデルとするものではないことが明らかになったが、かといってドイツのフィヒテの議論にみられるような、民族や言語の同一性といったエスニックな要素を基盤とするものともまた明らかに一線を画すものだということが確認された。フランス革命期の国民(nation)概念については、シェースだけを検討するのでは不十分なため、今後さらなる研究が必要であることを痛感している。しかしながら、本研究を通して、近代フランスにおけるパトリオティズムとナショナリズムのそれぞれの理念型としての特色を明らかにすることができ、その上で、実際の思想史的な系譜の上では、両者は複雑な交錯の軌跡を描いていることが明らかになった。これらの成果はすでに論文や学会報告で公表したが、最終的には単著としてまとめる予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①川出良枝、ルソーにおける「祖国への愛」と「人類への愛」、思想、査読有、1027号、2009、151-171。

[学会発表] (計4件)

①川出良枝、ルソーと「連合」(confédération)構想、社会思想史学会第36回大会、2011年10月30日、名古屋大学。

②川出良枝、パトリオティズム・ナショナリズム・コスモポリタニズム—ルソーとそのコンテクスト、ルソー研究会、2011年2月19日、日仏会館。

③川出良枝、「法の支配」と自由 —フラン

スを中心として、近代思想研究会、2010年11月6日、慶應大学。

④川出良枝、自由とは何であって、何でないのか—18世紀の論争空間、日仏文化講座「自由主義とはなにか：フランス・リベラリズムの系譜」、2009年6月6日、日仏会館。

[図書] (計4件)

①川出良枝(山岡龍一との共著)、岩波書店、西洋政治思想史—視座と論点、2012、1-38; 67-76;105-132;165-220。

②シイエス(稲本洋之助、伊藤洋一、川出良枝、松本英実共訳)、岩波文庫、第三身分とは何か、2011、257頁。

③川出良枝(ルソー『社会契約論』)、白水社、社会契約による共和国の設立(ルソー『社会契約論』解説)、2010、261-267。

④三浦信孝編(川出良枝他)、勁草書房、「自由とは何であって、何でないのか—17-18世紀の論争空間」(『自由論の討議空間』)、2010、29-60。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川出 良枝 (KAWADE YOSHIE)

東京大学・大学院法学政治学研究科・教授
研究者番号：10265481

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし